

台湾人日本語学習者の「でも」の会話使用に関する縦断研究

—使用位置及び共起表現を中心に—

陳 相州

キーワード 「でも」、台湾人日本語学習者、使用位置、共起表現

1. はじめに

一般に接続詞は語、文節や文を繋ぐ働きをもつものであるが、ディスコースレベルでは接続関係を示すほかに会話の進行にも何らかの役割を果たし、コミュニケーションをスムーズに運ぶために不可欠な要素と考えられる。

留学生たちと会話を交わす際に日本人に不自然さを感じさせる理由の1つは留学生たちの接続詞の使い方が日本人とかなり違うことであると言われている(倉持・鈴木2007)。従って、学習者が会話で接続詞を使用する状況及び日本語母語話者の使用との差異を究明することは日本語教育にとってかなり重要な課題と思われる。日本語の接続詞の中で特に「でも」を本研究の考察対象として取り上げたのは、先行発話に反する内容を提示する本質的な機能をもち、会話参与者間の人間関係にマイナス効果をもたらす恐れのある日本語「でも」が、ほかの接続詞と比較して解明する緊急性がより高いと判断したためである。

2. 先行研究

日本語学習者が口頭で接続表現を使用する状況について考察を行ったものとして、加藤(1984)、新村(1996)、近藤(2004)などの研究が挙げられる。加藤(1984)は学習者の日本語能力の発達とともに、逆説、因果、継起の関係を表す接続詞・接続助詞の使用がどのように変化していくかを、二人のオーストラリア人学生を対象とした追跡調査によって調べているが、学習者の日本語能力が高まるにつれて接続詞・接続助詞の使用頻度が高まり、接続詞の使用頻度は常に接続助詞のそれを大きく上回ると指摘している。

加藤(1984)の分析材料は双方向の対話データであるのに対し、新村(1996)

と近藤(2004)の分析材料は学習者が一方的に話すナラティブデータである。新村(1996)は独話における接続詞・接続助詞に焦点を絞り、日本人大学生と留学生の比較を行ったが、接続詞の使用について日本人大学生が「で」、「まず」などをよく使うのに対し、留学生は「だから」、「例えば」、「でも」の使用が特徴的であると説明している。近藤(2004)は広東語母語話者である中級学習者のストーリーテリングの談話を分析し、日本語母語話者と日本語学習者の談話に見られる接続表現の使用傾向の違いを考察しているが、「逆接型」の展開では日本語母語話者の傾向と全く異なっており、日本語学習者は「でも」が圧倒的に多く、「～ても」や「～が」の使用が非常に少なかったと述べている。

新村(1996)と近藤(2004)の考察結果からわかるように、日本語学習者は口頭で接続詞「でも」を使用する頻度が高いという傾向がある。しかしながら、日本語学習者の日本語学習が進むにつれ、「でも」の会話における使用がいかに変わっていくかということは、新村(1996)と近藤(2004)の考察では示されていなかった。縦断的研究を行った加藤(1984)でも日本語学習者の接続詞・接続助詞の全体的発達プロセスが示されてはいるが、「でも」使用の変化が提示されていなかった。そこで、本研究は諸先行研究の成果を踏まえ、台湾人日本語学習者が会話で「でも」を使用する状況、特に使用位置と共起表現を縦断的に調査し考察していく。

3. 調査方法

3. 1. 分析資料

本研究は台湾東呉大学の日本語学科が運営する日本語習得研究プロジェクト「Language Acquisition Research Project at Soochow University」(以下、LARP at SCU)で収集した台湾人日本語学習者のインタビューデータを分析資料とする。LARP at SCUは2004年3月に開始され、2003年9月に入学した37名の学習者による作文とインタビューデータを月に一回に採集し、学習者の3年半の発達プロセスを長期的に観察する目的で行われた。この3年半で学習者の作文とインタビューデータを計33回採取した。本研究の分析資料とするインタビューデータは、毎回学習者に作文を書いてもらった後、学習者が書いた作文の内容¹⁾について行われた20分ほどのフォローアップ・インタビューのフィードバックである。なお、本研究は台湾人日本語学習者の使用状況と比較するため、上村コーパス²⁾に収録された23名の日本人学生(男性:10名、女性:13名)のデータを対照資料として分析に使用した。LARP at SCUと上村コーパスのデータ

は、同じく力関係において上位にある研究者が学習者に対して行ったインタビューである。

3. 2. 調査対象者

本研究では、2008年7月の時点において台湾人日本語学習者の3年半のインタビューデータが完全に収集され、かつ日本人研究者がインタビュアーを担当した学習者2名S1とS2³⁾を調査対象者とする。表1は調査対象者のプロフィールであり、表2は調査対象者が調査期間に受けた日本語関係の授業科目と授業時間数を示すものである。

表1 調査対象者のプロフィール

学習者	S1	S2
性別	女性	女性
母語	中国語・広東語	中国語・台湾語
家族に日本語を話せる人がいるか	無	有：祖父
日本語と初めて触れた時期	大学入学後	大学入学後
授業以外で日本語を話す機会があるか	有 (日本人とお互いに言語を 教え合うこと)	無

表2 調査対象者が受けた日本語関係の授業科目及び授業時間数

	1年次	2年次	3年次	4年次
必修科目	初級日本語	中級日本語	上級日本語	ビジネス日本語
	日本語会話1	日本語会話2	日本語会話3	日本名作リーディング
	日本語文法1	日本語文法2	日本語作文2	
	日本語聴解1	日本語作文1	日本語聴解3	
			日中対訳	
	日本語聴解2	日本小説リーディング		
選択科目	日本語発音	日本昔話	日本現代事情	日本古典文学史
	日本概論	日本歴史	日本文化概論	新聞日本語
		日本地理	日本語学	研究方法指導
			日本近代文学史	日本古典文学
				日本語研究
				日中対訳
				日本文化
				日本語通訳
				日本語教授法
			日本語会話4	
授業時間数 (週)	12~16時間	13~19時間	11~19時間	4~24時間

また、調査対象者の日本語レベルについて、表3に調査対象者が受けた3回のSPOT-Test⁴⁾の成績を示す。3回のSPOT-Testの結果をまとめていうと、全体的にS1の日本語能力レベルは調査集団の中位群に属し、S2は上位群に属する。

表3 調査対象者のSPOT-Testの成績及びレベル

学習者 回数	S1		S2	
	成績	レベル	成績	レベル
第1回目	44	中位群	43	中位群
第2回目	53	中位群	54	上位群
第3回目	58	中位群	60	上位群

3. 3. 分析方法

LARP at SCUに収録された2名の台湾人日本語学習者S 1、S 2と上村コーパスに収録された23名の日本語母語話者のインタビューの文字化資料を用い、以下の手順で分析を行った。まず、インタビューの文字化資料から被験者の発話文を抽出し、それから被験者の発話文に混在するインタビュアーのあいづちと作文の読み上げなどの分析に不適切な内容を削除した。次に、被験者の発話文を日本語形態素解析ツール『茶筌』⁵⁾にかけ、その結果を手作業で確認した後で被験者の発話総語数と「でも」の使用数を算出した。最後に、「でも」の使用位置と共起表現を考察して集計を行った。台湾人日本語学習者のデータについては、33回のインタビューを学期ごと⁶⁾に区切り、台湾人日本語学習者の各段階の「でも」の使用状況の推移を観察した。

4. 分析結果

表4で示されたのは台湾人日本語学習者S 1(以下、学習者S 1)と台湾人日本語学習者S 2(以下、学習者S 2)の各学習段階の「でも」の使用数と使用率である。

表4 学習者S 1とS 2の各学習段階における「でも」の使用数及び使用率

番号	S 1							S 2						
	01-5	06-10	11-15	16-20	21-25	26-30	31-33	01-5	06-10	11-15	16-20	21-25	26-30	31-33
学期	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後
語数	1723	1376	1669	1572	2695	3895	2794	2105	2285	3238	2888	3340	3828	1929
「でも」 使用数	3	1	5	8	27	42	24	6	6	12	9	15	17	7
「でも」 使用率 (%)	0.17	0.07	0.3	0.51	1	1.08	0.86	0.29	0.26	0.37	0.31	0.45	0.44	0.36

学習者S 1と学習者S 2の3年半の「でも」の使用率の変化をより分かりやすいように図1と図2で示す。

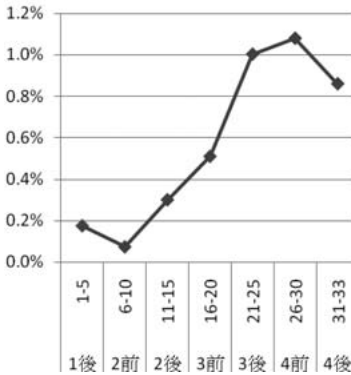


図1 S1の「でも」の使用率

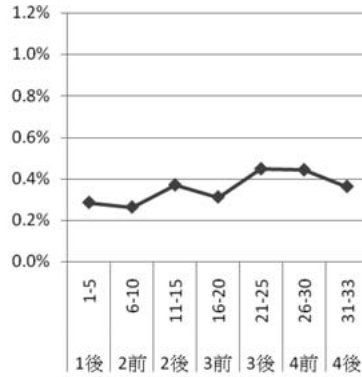


図2 S2の「でも」の使用率

図1は学習者S1の大学3年半の「でも」使用率の推移を表したものである。学習者S1の1年後期と2年前期の「でも」使用率はまだ低いが、2年後期から徐々に増加し、3年前期から3年後期にかけて大幅な伸びを示している。しかし、4年前期に入ると伸びなくなり、4年後期に使用率が下がることが観察された。次に、学習者S2の場合を見てみよう。図2からわかるように、学習者S2の「でも」使用率の推移は横ばいとなっており、2年前期から2年後期まで、3年前期から3年後期までの間に「でも」使用率の増加が見られたが、学習者S1のような急遽な増加はなかった。

図1と図2の結果から、学習者S1と学習者S2に共通して見られる現象は、学習者S1と学習者S2の調査最終段階の「でも」使用率は調査開始当初より多くなっていることである。学習者S1と学習者S2は実際に「でも」を発話のいかなる位置で使用しているのか、またいかなる表現と共起しているのかを、以下で検討する。

4. 1. 使用位置

本研究は「でも」の使用位置を発話冒頭部と発話中途部の2つに分けて考察する。発話冒頭部とは、発話者がターン⁷⁾を取得する場合であり、発話中途部とは発話者がターンを維持する場合である。

図3と図4は学習者S1と学習者S2の各学習段階において「でも」が使用される位置を示したものである。

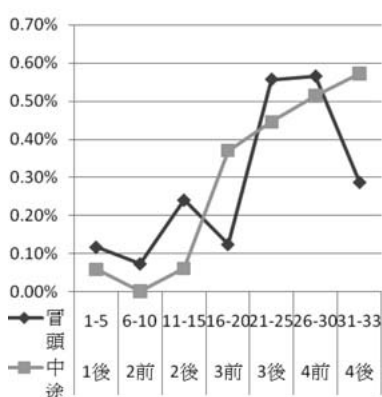


図3 S1の「でも」の使用位置

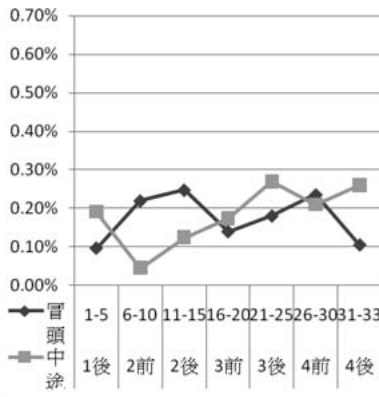


図4 S2の「でも」の使用位置

図3に見られるように、学習者S1は3年前期と4年後期を除けば、すべて発話冒頭部の使用が発話中途部より多く現われている。しかし、発話中途部における「でも」の使用は3年前期に入ると顕著な増加が見られ、その後も徐々に上昇する傾向にある。一方、学習者S2の場合では、図4で示されたように、3年前期を境に、全体的に3年前期の前の段階では発話冒頭部の使用が多いが、3年前期の後の段階では発話中途部の使用が多く観察された。

学習者S1と学習者S2の発話中途部における「でも」の使用について、図3と図4からわかるように、共に3年前期から顕著な増加が見られた。表2で示されたように、3年前期とは学習者が中級日本語の学習段階を終え、上級日本語の学習段階に入るところである。学習者はこの段階になると、文をどんどん積み上げてひとまとまりの発話を試みると思われる。文と文の論理関係を作るために、学習者の発話中途部における「でも」の使用が増加してきたと考えられる。

4. 2. 共起表現

「でも」は発話冒頭部と発話中途部において、それぞれいかなる表現と共起しているのかを、以下で説明する。なお、本研究が考察する共起表現は「でも」に前接したものに限っている。

4. 2. 1. 発話冒頭部

前述した通りに、発話冒頭部は発話者がターンを取得する場合であるが、発話冒頭部に現れた「でも」の共起表現として ϕ (例1)と緩和語句 (例2)の

2類があると考えられる。 ϕ は発話者が直接に「でも」を使ってターンを取得し、共起表現がないことを意味する。緩和語句とは、発話者が直接に「でも」を用いることを避け、言いよどみ（「まあ」、「あの」、「えーと」、「うーん」等）や応答詞（「はい」、「ええ」等）などのような実質内容がないものを使い、相手の発話をとりあえず受けるものである。

例1 [上村コーパス、T.O.(M)]

- T： そうですね。で、も、例えばねあの会社—なんかで、そういう、まあ、モデルみたいな、社会がそこにある訳ですね、学生が真似をしている、でそういう社会、っていうの、どうですかねえ。
- S： でも変わっていくと思いますよ。あの—、／やっぱり、僕—はあんまり、こう、マジョリティーに属する考え方をしない方ですけど、こう周りの雰囲気を見てても、やっぱり、更にこう、個人主義っていうんでしょうかねえ、人は人っていうのが、徹底—、してきてるんで、今の—おじさんとかが全部死ねば、亡くなれば。あはは。

例2 [上村コーパス、M.K.(F)]

- T： あの、学生さんは、その、学校の帰りとかは、例えばどんなことをするんでしょうね。
- S： うーん、でも、そんなに時間が無いですよ。だから少しどこかに寄って話をしたりそういう事が多いです。

以下の図5と図6は学習者S1と学習者S2の各段階の発話冒頭部における「でも」の共起表現を示したものである。

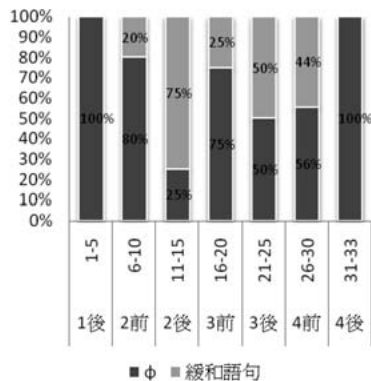
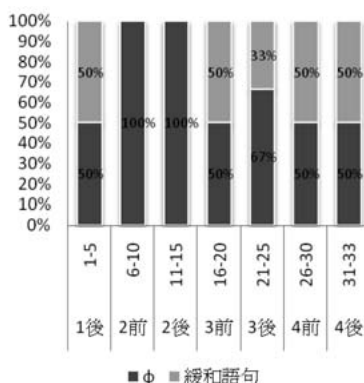


図5 S1の発話冒頭部の共起表現

図6 S2の発話冒頭部の共起表現

学習者S1の発話冒頭部における「でも」の使用は図5が示すように、 ϕ との高い共起率が目立つ(例3)。学習者S1は2年前期と後期の際に、何も加えずに「でも」を使用してターンを取得する傾向があったが、3年前期から徐々に安定し、3年後期を除き、 ϕ と緩和語句の使用が半分ずつの割合で現われている。

例3 [LARP at SCU、学習者S1：インタビュー21]

- T： あー。たぶんそうですね、おじいさんだから(はい)、そうですね。
 んー、けどまあ、おじいさんじゃなくても、たぶん怒りますよね。
- S：でも、おじいさんじゃなくても、んー、みんなは、んー、笑って、じゃあ大丈夫って。

学習者S1のみならず、「でも」と ϕ との高い共起率は学習者S2にも見られる(例4)。図6から、学習者S2は2年後期を除けば、ほかの学習段階においては ϕ との共起関係が中心であり、更に1年後期と4年後期では、「でも」と緩和語句との共起関係は1例も見られなかったことがわかる。

例4 [LARP at SCU、学習者S2：インタビュー28]

- T： へー？そうか。で、半分以上の高校生はそういうお弁当を食べてたんだ(んー)。んー。
- S：でも、んー、半分以上だけです。みんな、じゃなくて。

4. 2. 2. 発話中途部

発話者がターンを維持する場合であるが、前接したものの形式が完結標識(例5)、接続助詞(例6)、言いよどみ(例7)、その他のいずれであるかによって、4つに分類することができる。ここでいう完結標識とは、話者の1つの発話文が終了していることを示せるものである。例えば、「デス・マス/デシタ・マシタ」、「ダ/ダッタ」など、あるいは「よ」、「ね」のような終助詞である。

例5 [上村コーパス、T.A.(F)]

- T: ああ、そうですか。でも、前もって調べとかなないと、あの、ああ、見とけばよかったっていう風なこともありません。
- S: そうですね。それはあります。でもまあ、あの、あった時が、出会ったんだと。

例6 [上村コーパス、T.A.(M)]

- T: はい。ああそれで、何を勉強なさいました?
- S: ええとー、自分の専攻分野はま、あの、一応国際コミュニケーションなんですけど、でもそれとは全く関係のないような、写真とか、あと、/うーん、絵とか、あとドイツ語とかそういうのばかり取ってて、実際、こっちの学校に移った単位っていうのも、あの、3単位か4単位ぐらいで、ええ少なかったんですけど。

例7 [上村コーパス、S.K.(M)]

- S: ドーピングですか?
- T: はい。
- S: うーん、まあー、その方面についてよく分からないですねー。うーん、でも、やっぱりその記録をあげようと思えばやってしまう、ものなんでしょうけれどもねー。ええ。

学習者S1と学習者S2の各段階の発話中途部における「でも」の共起表現を図7と図8で示す。

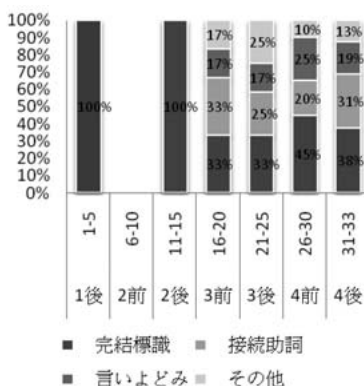


図7 S1の発話中途部の共起表現

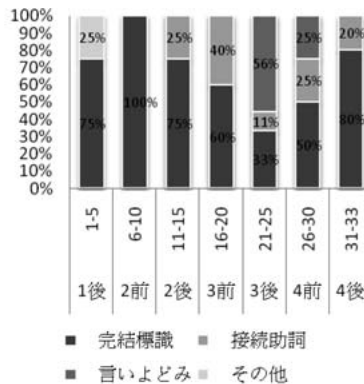


図8 S2の発話中途部の共起表現

図7から、学習者S1の発話中途部における「でも」の共起表現は2年後期まで完結標識の1種しかないことがわかる。3年前期に入ってはじめて接続助詞、言いよどみ、その他との共起関係が観察された。共起表現が多様になってきたが、発話中途部に現れた「でも」が一番多く共起したのはやはり完結標識である(例8)。

例8 [LARP at SCU, 学習者S1:インタビュー16]

T: ですね。はい、ええ、ええと、店長は日本人ですか？

S: この料理長は台湾の人。

T: 台湾人ですか？

S: 台湾人です。でも、この店は日本の支社。

一方、学習者S2の場合では、3年後期を除けば、学習者S1と同じく完結標識との共起がもっとも多い(例9)。図8に見られるように、学習者S2の完結標識との共起率は2年前期から3年後期にかけて下がり続けてきたが、4年前期から再び増え始めた。また、全体的に学習者S2の完結標識との共起率は学習者S1より更に高いということも顕著である。

例9 [LARP at SCU, 学習者S2:インタビュー33]

T: 辞めた人はいませんか？

S: 辞めた人はいます。でも、親友ではありません。

4. 3. 学習者S 1、S 2の4年後期の結果と日本語母語話者との比較

以上は、学習者S 1と学習者S 2の3年半の調査期間における「でも」の使用位置と共起表現の変化を分析した。もし学習者の中間言語の最終到達目標が母語話者の発話に近似することであるなら、学習者S 1と学習者S 2の調査最終段階である4年後期の使用が日本語母語話者のそれにどのくらい近づいているか、もしくは離れているのかを知ることは興味深い。日本語母語話者と学習者S 1、S 2の4年後期の「でも」使用の比較は以下で行う。

表5 学習者の4年後期の結果と日本語母語話者との比較：使用位置

		母語話者	学習者S 1	学習者S 2
使用位置	発話冒頭部	0.04%	0.29%	0.10%
	発話中途部	0.15%	0.57%	0.26%
全体的使用率		0.19%	0.86%	0.36%

表5から、学習者S 1と学習者S 2の4年後期の「でも」の使用位置は日本語母語話者と同様に、発話中途部の使用率が発話冒頭部を大きく上回っているが、「でも」の全体的使用率は日本語母語話者より遥かに多いことが明らかになった。

表6 学習者の4年後期の結果と日本語母語話者との比較：共起表現

位置	共起表現	母語話者	学習者S 1	学習者S 2
発話冒頭部	ϕ	6.00%	50.00%	100.00%
	緩和語句	94.00%	50.00%	0.00%
発話中途部	完結標識	21.00%	37.50%	80.00%
	接続助詞	46.00%	31.25%	20.00%
	言いよどみ	16.00%	18.75%	0.00%
	その他	16.00%	12.50%	0.00%

表6で示されたように、学習者S 1と学習者S 2の4年後期の各位置における「でも」の共起表現は日本語母語話者のそれと大きな差異が観察された。発話冒頭部の共起表現に関しては、日本語母語話者は緩和語句と併せて「でも」を使用する傾向が強いのに対し、学習者S 1と学習者S 2の使用にはこの傾向が見られなかった。一方、発話中途部の共起表現に関しては、日本語母語話者

は「でも」を接続助詞の後に使用することが多いのに対し、学習者S1と学習者S2は逆に完結標識との共起が多かった。

以上のことから、「でも」の使用位置という点では、学習者S1と学習者S2は4年後期の段階で既に日本語母語話者に近いレベルまで接近したと見ることができよう。しかし、「でも」の使用率と各位置の共起表現といった点では、この段階ではまだ日本語母語話者のレベルに達していないと言えよう。

5. 考察

以下では、学習者S1と学習者S2に観察された「でも」を使用する特徴をまとめ、考察する。

まず、学習者S1と学習者S2にはこの3年半の学習過程において、全体的に「でも」の使用率が日本語母語話者を遥かに超えている。日本語学習者が日本語母語話者より口頭で接続詞を多用する現象について、加藤（1984）と新村（1996）では日本語学習者に丁寧度レベルによって発話スタイルを変化させる能力が不十分のためであると解釈している。本研究で扱っている「でも」についても同様なことが言えると思われる。つまり、日本語母語話者はフォーマルなスタイルであるインタビューで、目上の人に対して「でも」に替わって「ただ」（例10）のようなほかの表現⁸⁾を使用しているが、日本語学習者は改まりの度合いが異なる場面での切り替えがうまくできず、発話の論理性を表すために初級段階で既に習った「でも」を頻繁に使用すると考えられる。

例10 [上村コーパス、T.O.(M)]

T： うん。法律的にはね、ほんとには飲んでもいけないし、煙草もいけない、ですよ。

S： ただ、うん、煙草とか、は別にいいんですけど、一気とか人に飲ませるっていうのは、それは法律以外の部分で、人として僕は、自分が飲まされんのやだから、人にも飲ませないんですけどね。

次に、日本語母語話者の「でも」の使用は発話冒頭部において緩和語句との共起が圧倒的に多いのに対し、学習者S1と学習者S2の「でも」の使用は ϕ との高い共起率が目を引くところである。つまり、フォーマルな場面で目上の人に対して、日本語母語話者は自分の口調と意見表明を柔らかく聞こえるように「でも」を緩和語句と一緒に用いて相手の発話を受ける傾向がある一方、学

習者S 1と学習者S 2は直接に「でも」を使って相手の発話を受ける傾向がある。それは母語転移の影響、あるいは学習者に言語使用の切り替えがうまくできないという社会言語能力の問題があるのかは今後、更なる考察が必要となる。

最後に、日本語母語話者の発話中途部において一番多く共起したのは接続助詞である一方、学習者S 1と学習者S 2の場合は完結標識である。中国語話者の日本語話しことばでの談話展開のスタイルは順接でも逆接でも完結文の接続で構成していく傾向が強いと渡邊（1996）の考察で明らかになっている。学習者S 1と学習者S 2に見られる発話中途部における「でも」と完結標識との高い共起率はまさに学習者の完結文の接続による構成の傾向と関与していると考えられる。

6. まとめと今後の課題

本研究では、2名の台湾人日本語学習者S 1とS 2の発話を縦断的に観察し、3年半の日本語学習過程における「でも」の会話使用を検討した。分析の結果は以下の通りである。

調査集団の中間群に属する台湾人日本語学習者S 1にはこの3年半の学習過程において、全体的に「でも」の使用率が高く、発話冒頭部の使用が発話中途部より多いということが明らかになった。また、発話冒頭部の場合では、何も加えずに直接に「でも」を用いてターンを取得する比率が高いことが特徴的であり、発話中途部の場合では、「でも」が完結標識の後に現れる傾向がある。

台湾人日本語学習者S 1は上級日本語の学習段階である3年前期に入ると、「でも」の使用に大きな変化が示されている。この時期の「でも」使用率の増加はかなり急激なものであり、「でも」の発話中途部の使用も急速な増加があり、着々と伸びていく傾向がある。発話冒頭部の共起表現については、「でも」と ϕ ・緩和語句との共起率が安定しつつある。更に、発話中途部の共起表現は完結標識のみならず、接続助詞や言いよどみなどの表現も多くなってきた。

一方、調査集団の上位群に属する台湾人日本語学習者S 2は、全体的な「でも」の使用率は高いが、台湾人日本語学習者S 1に比べ、この3年半の間では「でも」使用率の増加がかなり安定しており、「でも」の使用位置も3年前期を境に異なった使用傾向が観察された。すなわち、3年前期までの段階は発話冒頭部の使用が多いが、3年前期以降の段階は発話中途部の使用が多かった。また、発話冒頭部と発話中途部の共起表現については、「でも」を何も加えずに

使用してそのままターンを取得したり、「でも」を完結標識の後に付随して使用し、ターンを維持するという台湾人日本語学習者 S 1 と同様な傾向が見られた。

また、全体的に言えば、台湾人日本語学習者 S 1 と S 2 は日本語の学習が進むにつれても、日本語「でも」の使用率と「でも」の各位置の共起表現は日本語母語話者に近づく傾向が見られなかった。

従来の学習者の習得研究では横断研究が中心であり、縦断的に調査して考察したものは少ない。追田 (2002) が指摘したように、縦断的研究は少人数のデータであるため結果を一般化することが難しい反面、被験者のある一定期間の言語の実態を提示できるという長所がある。本研究は 2 名の台湾人日本語学習者を対象としたものであり、その結果も一般化することができないが、この調査を通して台湾人日本語学習者の「でも」の会話使用がどのように変化するかという一面を明らかにした。今後は音声面の変化にも目を向け、具体的には台湾人日本語学習者が「でも」を会話で使用する際にいかなる韻律的表現を伴っているのかを縦断的に考察したいと考えている。

注

1)

回数	調査時間	学年	作文のテーマ
1	2004.03.17	1年後期	私の一日
2	2004.04.14		春休み
3	2004.05.05		私の部屋
4	2004.06.02		私の夢
5	2004.06.23		高校生活
6	2004.09.22	2年前期	忘れられない出来事
7	2004.10.27		十年後の私
8	2004.11.24		もし一千万円当たったら
9	2004.12.08		大学生活に期待すること
10	2005.01.05	2年後期	私と日本語の出会い
11	2005.03.02		お正月
12	2005.04.06		携帯電話
13	2005.05.04		母の日
14	2005.05.25		友情
15	2005.06.08		流行
16	2005.09.28		夏休み
17	2005.10.19	3年前期	私の愛用品
18	2005.11.23		旅する
19	2005.12.24		選挙
20	2006.01.04		2006年を迎えて
21	2006.03.01	3年後期	最近の出来事から
22	2006.03.29		スポーツ
23	2006.04.26		町
24	2006.05.24		私の愛読書
25	2006.06.14		最後の夏休み
26	2006.09.27	4年前期	台湾のデモについて
27	2006.10.18		ゴミ問題
28	2006.11.22		台湾の夕食文化
29	2006.12.13		コーヒー文化
30	2007.01.03		台湾の野良犬
31	2007.03.07	4年後期	少子化
32	2007.04.11		大学生の恋愛観
33	2007.05.16		LARPに参加した感想

- 2) 上村コーパスは日本語母語話者と非母語話者の発話のパターンの比較分析と日本語教育向けの基礎資料となる日本語会話データ構築を目的とし、日本語母語話者(54名)、非母語話者(56名)計120名に行った15分の日本語 OPIの文字化テキストを収録したものである。
- 3) S 1 と S 2 は本研究の被験者番号である。
- 4) 小林他(1996)により開発された「日本語学習者に対するプレースメントテストとしてのSPOT (Simple Performance-Oriented Test)」のカセットテープ(ver.B)を使用した。満点が60点である。第1回目は2004年3月(1年後期の初め)、第2回目は2004年9月(2年前期の初め)、第3回目は2005年4月(2年後期の初め)に行われた。
- 5) 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科自然言語処理学講座(松本研究室)に開発された日本語形態素解析ツールである。
- 6) 1年後期(1-5回)、2年前期(6-10回)、2年後期(11-15回)、3年前期(16-20回)、3年後期(21-25回)、4年前期(26-30回)、4年後期(31-33回)
- 7) メイナード(1993:56)はターンについて、「会話において一人の話者が話す権利を行使するその発話中の単位で、会話の当事者によりその何らかの意味又は機能を持っていると認められたものである」と定義している。
- 8) 陳(2008)でも、論文指導の場面において、日本人学生は「でも」、「だけど」、「しかし」などの対比談話標識より、「ただ」を使用する頻度が高いと指摘している。

参考文献

- 加藤英司(1984)「接続詞・接続助詞の使用頻度と日本語能力との関係」『日本語教育』53、日本語教育学会、139-148。
- 倉持益子・鈴木秀明(2007)「日本語学習者における接続詞の習得——留学生の接続詞使用状況」『神田外語大学紀要』19、神田外語大学、211-234。
- 小林典子、フォード丹羽順子、山元啓史(1996)「日本語能力の新しい測定法<SPOT>」『世界の日本語教育』6、国際交流基金日本語国際センター、201-218。
- 近藤邦子(2004)「香港の大学における日本語学習者によるストーリーテリングの接続表現の問題点」『早稲田大学日本語教育研究』5、早稲田大

学大学院日本語教育研究科、77-91。

迫田久美子（2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』、アルク。

新村知子（1996）「独話における接続詞・接続助詞表現の特徴－日本人大学生と外国人留学生の比較において－」『金沢学院大学文学部紀要』 1、金沢学院大学文学部、56-63。

陳相州（2008）「日本語会話データに見られる対比談話標識の使用実態」『言葉と文化』 9、名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻、237-252。

メイナード・K・泉子（1993）『会話分析』、くろしお出版。

渡邊亜子（1996）『中・上級日本語学習者の談話展開』、くろしお出版。